＊日刊工業新聞　2026年1月30日（金）（29面：科学技術・大学）

2025年度天田財団助成式典を開催

PR

公益財団法人天田財団（神奈川県伊勢原市、磯部任代表理事理事長）は2025年11月29日（土）にAMADA FORUM（神奈川県伊勢原市）で、2025年度の助成金採択者に助成金目録を贈呈する「2025年度天田財団助成式典」を開催した。式典には塑性加工分野・レーザプロセッシング分野の助成を受けた研究者、来賓、財団関係者など、167名が参加した。

今回採択された助成は114件、助成総額は2億8322万円で、このうち「研究開発助成」は85件・2億6221万円、「国際交流助成」は29件・2100万円となった。これにより、1987年の財団創立から38年間の累計助成件数は2473件、累計助成総額は45億7578万円となった。

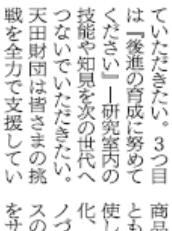
ともに「人を育て、知を拓き、未来を創る」

挨拶　磯部任
天田財団　代表理事理事長

式典の冒頭で、天田財団の磯部任代表理事理事長（株式会社アマダ代表取締役会長）が次のように挨拶した。「日本の研究環境は大きな転換期を迎えています。技術の急速な進展と国際競争の激化に対し、研究現場は複合的な課題に直面しています。たとえば競争的資金の獲得が難しく、若手研究者が中長期的に挑戦できる環境を確保しにくくなっています。短期的成果を重視する風潮は、基礎研究や将来につながる探索的な研究を敬遠することにもなりかねません。工学系や応用研究は論文数などの定量指標で評価されにくく、社会実装に時間と人材を要するため、短期的手法に反映されにくいという構造的な問題もあります。日本では博士取得後のキャリアが不安定なため、人材流出や技術シーズの減少にもつながっています。研究室のシーズと現場ニーズをつなぐ機能が弱く、社会実装の障害となっています。」

「天田財団ではこうした課題に対し、次の3点に注力して支援活動を行っています。1つ目は『安定的な研究環境の提供』―若手研究者が自由な発想を試し、知見を深める期間を確保することが重要だと考え、助成に『若手研究者枠』を設定しています。2つ目は『実装思考の評価』―研究論文としての価値だけでなく、社会実装の可能性や企業ニーズとの整合性、技能継承の観点も評価に組み込んでいます。3つ目は『産学連携の場の提供』―産業と研究をつなぐ場として、助成研究成果発表会を毎年開催しており、研究室のシーズを天田財団ニュースとして産業界へ発信しています。」

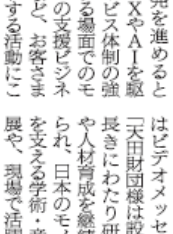
「今回助成を受けられた皆さまに、お願いしたい点が3つございます。1つ目は『長期的な視点を持って、研究に取り組んでください』―短期指標だけでなく、継続的な研究課題を設定して、深い成果を目指していただきたい。2つ目は『常に現場と対話してください』―製造現場のニーズに耳を傾け、技術の実装を意識した研究設計を行っていただきたい。3つ目は『後進の育成に努めてください』―研究室内の技能や知見を次の世代へつないでいただきたい。天田財団は皆さまの挑戦を全力で支援していきたいと考えています。ともに人を育て、知を拓き、未来を創りましょう。」



総評　光石衛
東京大学 名誉教授

続いて、来賓の株式会社アマダ・山梨貴昭代表取締役社長執行役員が「私たちを取り巻く社会環境においては、地球規模での環境問題や急速な労働力不足、それを補うように加速するAIやロボットとの共生、デジタル技術による生活・ビジネススピードの加速など、直面する社会課題に対してさまざまな技術が生み出されてきています。モノづくりの世界においてもそれらの技術を取り入れながら、持続可能な社会の実現に向けた変革が求められています。アマダグループでは単に加工機械を提供するだけではなく、常に生産性や加工精度の向上を追求し、環境負荷の低減、高効率を重視した新商品の開発を進めるとともに、DXやAIを駆使したサービス体制の強化、あらゆる場面でのモノづくりへの支援ビジネスの展開など、お客さまをサポートする活動にこれまで以上に注力していきます。」

「しかし、このような変革と挑戦を実現し、未来を切り拓く技術を生み出すには、企業の独力だけでは限界があります。そこで本日ご列席の助成を受けられる皆さまの研究が重要なキーになってきます。皆さまが取り組まれている研究が革新的なブレークルーを生み出し、社会の持続可能性を高めるための素晴らしい技術のシーズとなることを心から期待しています。アマダグループは、こうした研究の重要性を深く認識し、これからも産学共同で活動をしてまいりたいと考えています。皆さまの研究成果が産業界に大きな実りをもたらし、豊かな社会の実現につながるよう、積極的に連携を深めてまいります」と祝辞を述べた。



招待講演
ゼリーン・ダニエラ
産業技術総合研究所 主任研究員

同じく来賓の文部科学省科学技術・学術政策局の井上睦子科学技術・学術総括官はビデオメッセージで、「天田財団様は設立以来、長きにわたり研究助成や人材育成を継続してこられ、日本のモノづくりを支える学術・産業の発展や、現場で活躍する技能者の育成にも貢献されていることに、深く感謝申し上げます。文部科学省としましては、天田財団様からのこのようなご支援は、科学技術イノベーションや経済・産業の競争力を高める上で非常に重要であり、大変心強く感じております。公的な資金と民間の財団による支援が相互に補完し合うことで相乗効果を生み出し、多様な官民投資が研究に進むエコシステムが形成されること、また資金だけでなく技術や人材が循環するエコシステムが、日本の競争力の源泉になると考えております。」

「助成を受けられた皆さまには、今回の助成を励みに力強く研究を進めていただきたいと思います。同時に産業界や地域社会、ほかの研究者との対話を深めていただき、日本発の新しい加工技術、モノづくりの価値をつくり出していただきたい。そして、後進の新しいロールモデルとしてご活躍されますことを心から祈っています」と語った。

祝辞　山梨貴昭
株式会社アマダ
代表取締役社長執行役員

招待講演　松野崇
鳥取大学 教授

一筋縄ではいかない研究にも柔軟な対応で支援

助成金目録贈呈式が行われ、東京大学の光石衛名誉教授（兼日本学術会議会長、天田財団評議員）が選考委員会代理として総評を述べた。

「本年度も多くの応募があり、厳正なる選考を経て114件、2億8322万円の研究開発助成として総評を述べた。

「本年度も多くの応募があり、厳正なる選考を経て114件、2億8322万円の研究開発助成として総評を述べた。

「研究は一筋縄ではいかないことが多く、成功ばかりとは限りません。むしろ9割方は上手くいかないと感じています。失敗することも貴重な情報です。ここにいらっしゃる皆さまの活動によって、製造業における新たな知見が生み出されることを期待いたします。そして、天田財団の助成が皆さまの研究活動の一助となれば、この上ない喜びです。皆さまの研究のますますの発展と、それが社会に適用されますことを心より望んでいます」と研究者へ向けてエールの言葉を送った。

助成金目録を91名に授与

助成金目録贈呈式では、磯部理事長から出席した91名の助成研究者に対して、「人ひとり助成金目録が贈呈され、記念写真を撮った。贈呈式の後、天田財団の研究助成を活用し、2021年度に研究成果報告をした研究の中から、鳥取大学・松野崇教授が「中Mn超高張力鋼のLüders変形時における局所応力の計測」、産業技術総合研究所のゼリーン・ダニエラ主任研究員が「均質な脂質―タンパク質構造のハイスループット生産に向けたフェムト秒レーザープロセス開発」と題した招待講演を行った。

研究成果の普及啓発活動を積極的に行う

天田財団では、助成研究の成果を発表する場として、4月22日にパシフィコ横浜で「助成研究成果発表会」を開催する予定です。詳細は天田財団のWebサイトにて、3月上旬頃にお知らせする予定です。
（https://www.amada-f.or.jp/）